

ヒノキ漏脂病

1 はじめに

「ヒノキ漏脂病」による被害は、昭和初期に東北地方で報告されて以降、ヒノキの造林面積拡大に伴って全国的に発生していることが明らかになり、ヒノキの材質劣化病害として大きな問題となっています。

長野県では、ほとんどみられませんでした。2002年（平成14年）に県北部のヒノキ林数箇所で被害が見つかりました。

2 ヒノキ漏脂病

1) 被害樹種および被害発生林齢

被害は、ヒノキ、ヒノキアスナロ（ヒバ）、サワラのⅢ齢級ごろから発生し、高齢化するにつれて被害率が高くなる傾向があります。

2) 病原菌

本病の病原菌は、*Cistella japonica* という子のう菌の一種で、樹皮内に傷害が生じることをきっかけとして病原菌が侵入し発病すると考えられています。

3) 被害部位

被害発生初期は、地際から3m程度までの樹幹に被害が発生し、高齢になると上部へも被害が及ぶようになります。

4) 被害形態

被害木では、樹幹から透明な樹脂（ヤニ）が多量にダラダラ流下します（漏脂症状）。流下したヤニは時間が経過すると乾燥して黒色に変色し、流下は10年程度続きます（写真-1）。

ヒノキは、樹脂道（ヤニを生産する組織）を持たない樹種ですが、漏脂病被害木の内樹皮には、傷害樹脂道が多数形成されます。傷害樹脂道が形成された部分には「樹脂のう」といわれるヤニがたまった部分も形成され（写真-2）、この傷害樹脂道と樹脂のうから樹幹表面にヤニがあふれ出る現象が漏脂症状です。

被害部の形成層は、ヤニによる障害で肥大成長を著しく低下するか、細胞が死んで肥大成長を停止します（年輪形成の停止、写真-3）。

肥大成長が停止した被害部の周囲は、肥大成長を続けるため、時間が経過すると樹幹は凹状、扁平、溝状などに變形し、木部も被害部を中心に変色します（写真-4, 5）。また、樹幹が變形し



写真-1 被害木



写真-2 樹脂のう

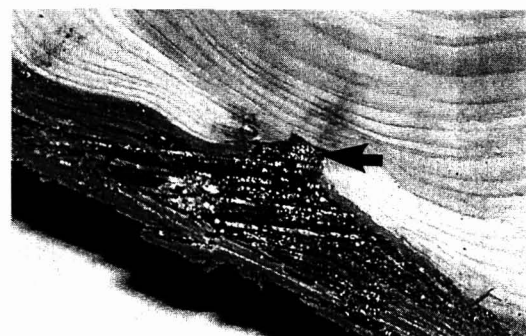


写真-3 被害部の年輪形成停止

た被害部の長さは1 m以上になることが多く、被害木は木材としての利用価値が大きく低下します。



写真-4 被害木の樹幹



写真-5 被害部の断面

3 被害が発生しやすい環境

本病の被害が多い環境としては、以下のような環境があげられています。

- ・ 積雪深1～1.5m以上の多雪地
- ・ 高標高で凍害・寒風害が発生しやすい箇所
- ・ 土壌が肥沃で水分の多いスギ適地（肥沃な土壌環境は、ヒノキが本病にかかりやすくなるとされている。）
- ・ スギ林に隣接した箇所

環境以外の要因として、立木の受傷が発病を促進することが知られ、樹液流動期（春から夏）の

枝打ちや樹幹を傷つける枝打ちといった不適切な枝打、スギ・ヒノキの穿孔性害虫であるスギカミキリ、ヒノキカワモグリガによる穿孔被害、およびニホンジカなどの剥皮被害などが発病要因としてあげられています。

4 防除対策

現在のところ薬剤などによる防除方法は確立されていません。防除対策は、以下のような施業を中心としたものがあげられます。

- ・ 高標高地、多雪地域にはヒノキ造林を行わない。
- ・ スギ適地への造林は避ける。
- ・ スギ林に隣接する植栽を避ける。
- ・ 枝打ち、間伐は適切な時期と方法で行う。
- ・ 被害木は除間伐時に早めに伐倒し、林外に搬出する。

本県で確認されているヒノキ漏脂病による被害は、県北部のスギ林地域にある一部のヒノキ林分ですが、他の地域でも注意が必要です。

（育林部 岡田）

参考文献

周藤靖雄（2002）ヒノキ漏脂病（全国森林病虫獣害防除協会編：森林をまもる-森林防疫研究50年の成果と今後の展望-）。全国森林病虫獣害防除協会，東京，125-136